地域自然史と保全　*40*（*2*）：*161* － *162*，　*2018*

追　悼

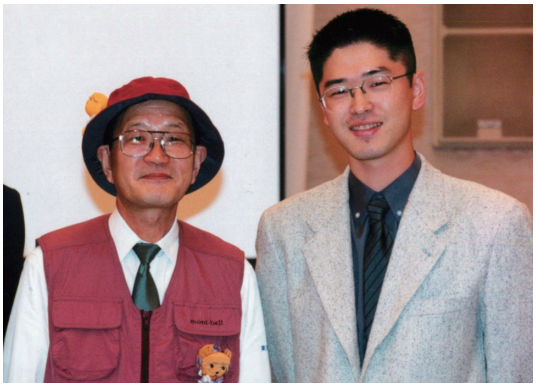
熊井久雄先生を悼む

大阪市立大学大学院理学研究科　　井　上　　淳

Memorial address to Prof. Hisao Kumai. Jun Inoue*(*Graduate School of Science/Faculty of Science, Osaka City University*)

平成 30 年 10 月 28 日に，本会の運営委員を長年務められた大阪市立大学名誉教授の熊井久雄先生がご逝去されました。長年，ご指導頂いた 1 人として熊井先生の略歴とお別れの言葉を書かせて頂きます。

熊井先生は，東京教育大学理学部（現筑波大学）を卒業され，農林水産省に技官として勤められた後，昭和 46 年に信州大学理学部助手に就任されました。そして，昭和 63 年より平成 15 年に定年退職されるまで大阪市立大学理学部教授として研究・教育にご尽力されました。この間に日本第四紀学会の評議員，副会長，会長，第四紀総合研究会の代表，日本地質学会の評議員などを歴任されました。また，国際第四紀連合の層序委員会委員，アジア太平洋小委員会委員長など国際学会の委員なども務められています。



熊井先生と並んで撮っていただいた写真．還暦お祝い会で．

熊井先生のご専門は，第四紀層序学（第四紀：地質時代の 1 つで現在を含む最近の時代，層序学：地層を区分し，その新旧関係を明らかにする分野）と水理地質学（地下水の挙動や分布について地質学的に解析する分野）と認識しています。こうした専門分野を基盤に大阪市立大学では，「人類紀自然学研究室」を立ち上げられました。私が大学に入学し，熊井先生とお会いしたのも丁度この頃でした。「人類紀自然学」という名称について熊井先生は次のように述べられています。「人類が地上に現れて以降，その人類が自身を取り巻く自然から受けた影響や，その自然に作用することによって自然自体を改変してきた歴史を明らかにして，そこから法則性を導き出し，将来の予測や対策に結び付けようという目的で研究されているのが『人類紀自然学』である」（共立出版「人類紀自然学」まえがき）。地質学の研究室の説明でありながら，「地質」や「地層」という言葉が一度も出ることなく，「人類」という言葉が何度も出てくるあたりが，熊井先生の大局的で分野にこだわらない懐の大きさを感じさせます。また，熊井先生は人類化石や人類の進化にも強い関心を示し，晩年に至るまでジャワ島の原人化石（いわゆるジャワ原人）に関連する研究・調査のため，インドネシアにも何度も足を運んでおられました。

私が，人類紀自然学研究室に学生として在籍し

関西自然保護機構業績　第 628 号
*corresponding author(✉): juni@sci.osaka-cu.ac.jp

た頃は，熊井先生が国際第四紀連合の層序委員会委員としてご活躍されていた頃でした。2000 年頃，地質時代の中から「第四紀」（Quaternary）という名称を削除しようという動きが国際的にあったのですが，国際学会の委員としてこれに大きく異を唱え，研究室のゼミなどでも熱く語られていたことは，今でも良く覚えています。また，昨年頃からニュースになっている新しい地質時代名の候補「チバニアン」（千葉期）の由来である千葉県市原市の地層（千葉セクション）を国際模式地として提案する運動を最初に先導したのも熊井先生です（このあたりの歴史は，千葉セクション GSSP 申請グループの公式ホームページの「千葉セクション提案までの歴史」に詳しく書かれています）。お元気な頃は，千葉セクションが国際模式地になることを強く願われていたので，正式に国際模式地に採択される前に亡くなられたことは非常に残念です。

熊井先生がおられた頃の研究室は最大 40 名ものメンバーが所属しており，研究分野も本当に様々で，私が知る限りにおいても多くの研究者を育成されました。また，多数の留学生を研究室に招き，国際色豊かな研究室を主宰されていました。これらも熊井先生の懐の大きさによるものと思います。

これまで熊井先生からいただいたご指導と先生の御功績や御人柄に対し，深い尊敬と感謝の念を捧げますとともに，心からのご冥福をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。合掌。

熊井先生の還暦お祝い会（平成 11 年 11 月 6 日）.